

環海異聞

拾三

ル 2
1368
14







環海異聞卷之十三

帰朝洋中之化

翌子、年

文化元年  
甲子

四月下旬

マルケイサト云

多山亭子小船極多

マルケイサト云彼人呼ル極小舟力ナク

より付不遠千里を十六合世方里程之

之

海路記を按ずる多しは是處(是船)多し彼

五月廿四日我四月十五日と申渡客四月

下旬と是(は)お渡りせり

は島の近所又六七島も何れとりし船中より(は)是(は)  
舟(は)此處海深く波浪多し急き(は)お船(は)乃  
ん(は)も(は)是(は)一神(は)の指子(は)て(は)湊(は)も(は)最後(は)也(は)  
し(は)一港(は)を(は)入(は)り(は)船(は)を(は)泊(は)む(は)形(は)舟(は)乃(は)人(は)皆(は)  
徳(は)り(は)は(は)是(は)存(は)人(は)丈(は)高(は)く(は)容(は)貌(は)恰(は)も(は)鬼(は)人(は)の(は)如(は)し

男女た(は)裸(は)體(は)前(は)陰(は)と(は)常(は)お(は)何(は)も(は)一(は)指(は)方(は)地(は)也  
と(は)お(は)向(は)ふ(は)の(は)濱(は)邊(は)を(は)見(は)し(は)果(は)し(は)裸(は)ある  
男女之(は)四人(は)入(は)申(は)し(は)彼(は)是(は)送(は)し(は)男(は)の(は)丈(は)七(は)尺  
飯(は)取(は)面(は)より(は)お(は)身(は)を(は)足(は)の(は)端(は)より(は)彫(は)お(は)入(は)書(は)を  
お(は)陽(は)物(は)と(は)陰(は)を(は)一(は)但(は)先(は)の(は)皮(は)を(は)少(は)し(は)引(は)き  
伸(は)し(は)糸(は)の(は)女(は)き(は)もの(は)を(は)以(は)て(は)結(は)ひ(は)重(は)なり(は)女(は)丈(は)テ  
五人(は)程(は)入(は)書(は)し(は)先(は)か(は)ら(は)り(は)前(は)の(は)寸(は)さ(は)き(は)の(は)女(は)き  
草(は)乃(は)葉(は)と(は)少(は)し(は)なり(は)連(は)ね(は)る(は)物(は)を(は)以(は)て(は)垂(は)れ(は)下(は)す



事いんるか〜船方の者られを思ひ制せん  
〜あると使事と〜との尋常ありきり付島人  
如何の事仕出せんも付〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
扱せり用水を増〜加せんもの此より船頭  
考せ〜ふたの体でけ〜熱候無合ふれ及び  
〜〜〜甚速哉〜〜〜一日彼玉乃船あり兩人中船  
潜き分〜若かりされ島人といふ事ありを島人  
たふ裸體より面と服〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

唐人のめくま〜布 まじい本皮の  
仙臺方言 のめき物と シメツアビ  
ハニモヒキ  
め〜〜〜は島人中船のカペタンと書付と以りる  
我〜〜〜人ハ〜〜〜國を人々ハラ〜〜〜スケ玉の  
者なり松餘年以ては島〜〜〜源島〜〜〜海をき便も  
め〜〜〜月りと送りし内島主の如塔とあり合ふ  
永住するゆゑあり〜〜〜は二人の者カロシア辯も  
通する所あり〜〜〜もあま乃〜〜〜文も毎〜〜  
りあり〜〜〜互に定字の〜〜〜物あり〜カペタン等

類中甚多ハ巾箱は山ありて新水も増入る船を  
寄セし小舟船ありしより山入船の在り前夜に  
層おもひ纏ひ群をけ方より中より各舎に  
唯ざらしく友のこゝろをこゝろさたり限りし何  
卒先ツ是を逃のけ新水を山より求め入る  
るゆゑ舟ひくられしといひたり彼女人の答ふ女  
と船一あり試ふ水又等として好淫せしめ  
酔つ物と世へくたあし人衆和まそ何れも

自生ありてと意あり此より限り使常知ぬ  
顔より上級の若人水又た月通し教の如く  
之扱セハ何れとて鉄籠ツカのそれ少くつ所を  
まねちひし怪ひ持たれりたれより男女んを  
ちしきり舟乃若く手傳陸より水等を運轉し  
今事ふぬちひあつ桶へ汲くむ水は舟の人  
二三人あり運ひ入る物を山人の老人を擔カヌ  
入れありは力量とらり急いき也

一 彼事教へて 友人の老へて 此の下等と  
謝禮とて 送るなり

一 二サノツトき 上陸して 謝儀とて 島主にも 出  
金のよし 又金<sup>カネ</sup>を 銭<sup>ゼン</sup>と 謝礼とて 贈り 魚を  
用意せしめて 彼より 承と返礼なり

一 島主別て 忠告者の 忠告して 此島人<sup>シマノヒト</sup>  
も 人とも 食す 今に 老人の 食ひ 祝儀と  
いふも 擇む 所あり 土地に 椰子 多く 出

たれと 食すといふ

一 島の 内居<sup>ウチ</sup> 中より 島の 別ふ あり 岩の 接間<sup>サマ</sup>  
を しく 居ると 申す

一 柄拂<sup>ツカハライ</sup>の めく 魚骨を 以て 煮て 毛<sup>モ</sup>を 煮き  
て 其<sup>ウラントゲ</sup> 魚刺<sup>イサトゲ</sup>を 煮て 煮物<sup>ニクモノ</sup>あり 土地を 以て 煮  
物<sup>ニクモノ</sup>の 相<sup>アヒ</sup>を 煮て 思ひ<sup>オモヒ</sup>の 持<sup>モチ</sup>根<sup>ネ</sup>あり 既<sup>イ</sup>に  
より 手<sup>テ</sup>豆<sup>マメ</sup>の 端<sup>ハタチ</sup>を 煮て 煮物<sup>ニクモノ</sup>あり 但<sup>タ</sup>に 融<sup>ユク</sup>  
ぬ 魚<sup>イサ</sup>角<sup>カド</sup>を 煮て 煮物<sup>ニクモノ</sup>あり 是<sup>コノ</sup>を 煮て 煮物<sup>ニクモノ</sup>



角ツの如く扱水丈の内儀より山人と廣腕  
 文字と書ききり彫りせむる小櫃の如きもの  
 ありて大器と刃の上ふあて櫃とうちて疵  
 付血出ぬる小器ありて好き所ありてけり又  
 子等し又ありて万もあく出れ上より甚き際  
 ありて世に文字魚西文あり何事何月哉  
 個々此を山イ木レ抄シしといふをばせし申し  
 ば山イ木レの固クり  
 文字ありて申す

イレズミドクダ  
 點器圖



島人男女圖



一島の廣サ何程あるや志々此進々此島出船  
 一層おききし其相ま日の比対比志々抜けし  
 故餘程大なる船と云々う海のうちふ  
 高き山も見る

一島の船は大材の中と隔めたる相々大材の形  
 とカメドト船先船尾触れ凡本と彫る尾の形等  
 細長く船も易き板多し其れ故々も船一  
 片等物ありたの図の如し

ミルケイサ島船圖



一如此世界の中絶てこれなきもいふし  
と船の令より皆島人をセイカくし  
いひきり鬼人といふ事なり  
一教日洋船してはふと叢中

按此マルケイサキ南亞墨利加海の西  
ある遠洋ある土地汽船の一小島あり  
昔阿、歐羅巴洲の令より通船せ  
ざると思ふ此島意圖不見る所亦近東

拂郎察國新製世界圖ありこれを出し  
は交將來の魯西亞版世界圖あり出さ  
モナワタル  
但しこれ不在拂郎察國の圖を校すれ  
十文の厚紙あり拂郎察國を以て正  
とすしと間氏より又曰洋中船路の  
標的とすすあるあり以て舟と書せし  
メアラ  
とス申

五月二十四日 マルケイサ出船

海路記と揃するふは是の船を強きより日較  
 十三日ふ〜〜〜 彼六月六日我四月廿九日  
 叢帖と見申漂客暗記するふの出船の日  
 二三日の長あり  
 是より大抵東へ向て去るは船中又世界の  
 北へ出〜〜〜 船中初めの如く海宴をか〜  
 行〜〜〜

マルケイサ叢帖に浮海路記

彼 六月七日	我 四月廿九日	彼 六月八日	我 五月一日
〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃
〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃
〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃
〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃
〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃 〃

揃ふ世界の北中といふ、予エラトル 赤道  
 間氏曰カナリヤのベツロ島より 逆經度一百  
 廿度のおふ〜〜 赤道を北へ 距りの船路  
 たり〜〜 彼同年六月十三日

我五月六日午後三時マルケイサと開航して  
七日めに見ゆる也赤道下と西より南へ又  
南より北へ一回繞る所の海海彼人  
之も稀有の事なり我東方の人  
をりて返りしも開闢千古未曾有の  
事なり

彼六月十日 我育七日の彼六月廿七  
我五月廿七日  
四日百五十分  
赤道下を三時三十分程走りし五百里程をサ

ペイウケといふ大島の邊へ船を寄すは橋は半年末の  
方へ走り足つきり橋の長サマルケイサより大島  
船ふん申 仔豆の大橋程也  
あまき船 島中も見る組島山々  
是の島候マルケイサ同様船は是等島は島山の  
根を船をよせ夜に沖へ出せり

何れも舟船と出入すは船中の人少開航  
此島に何れの儀ありてハラニリースケの人  
未だ形なりし船にせぬときけりハラニリースケ

中玉一人服せぬ國あり、如何振る後集  
つるも難計有疑、思ひて上陸せぬ  
なり

島人マルケイサ人多言同振る船中の事  
東より知る、男の髪と砂切、  
甚く奇怪あり、必ず前歯を抜き、  
丈夫、日本人程あり、女の髪長く、額上の  
あざ、砂切、此島の髪毛は白あり

これ自然あり、又白きものを傳ふるたし  
うふ乙とめす木の皮のぬき物と前歯  
なり

船中の一人曰く、此島、日本地へ近く、前海より  
いふ、く、辰巳の方へ、少く、宮あり、  
圖を出して示せり

サンペイツケ島人男女圖



島人の舟より承を買求め本船へ金とて  
 外交易り等もあ

地圖海流記と抄するにサンペイツケといふ  
 所ありサントウイクを山ふ船とよせしとある  
 此所の是遠ありしに船をよせしとあり彼  
 六月廿八日我五月廿一日と云ふありマルケイサ  
 と出帆し十五日めをり海をぬるに七  
 日と経てありしに是に不審<sup>イブカ</sup>し屋の月



島根一舟と考せし地形毎に度数等を  
測りてみる者ありし

間氏曰此島は往々西洋人海船の標的と

すると思ふ事多し思ふ所西墨利加の南海

と云ふマルケイサと的と云ふ西ふし

又サドウィクと的と云ふ北の海は方位

と轉し我邦或は唐山印度の南海

海と云ふ事ありは交魯西亜人も云ふ

効ひてカミシヤーツカに云ふと思はるは國魯

西亜人の測量は計百斗程斗度許ふあり

拂郎察人測量する所あり此島の経

度斗百七十七度許ふあり相較シテ五度

の差あり拂郎察人の測量を是とするふ

似たり  
あれ魯西亜の我考の測量も  
是あり

はサニペイツケと云ふ船は是よりカミシヤーツカに向ふ

海路死を按する所サニペイツケ彼六月廿八日

我育 十一日 忘るるを幾日か書くも多や其月

廿九日 我育 廿二日 以下 彼七月十二日 我六月 七日

と日記 十四日の百原園子日曆と関して

義知多ううに 漢文等りの所 廿二パイツケ

子の教。洋船にせざる振子あはれはるの日

曆記するや否や解すううに

日記十四日と名て後の日記

彼七月十二日 我六月七日 以後日曆合し彼七月

廿日 我六月廿四日 彼七月二十日 我六月廿五日 彼

八月一日 我六月廿六日 彼八月二日 我六月廿七日 彼

八月二日 我六月廿八日 カミシヤーツカ 忌山岸とん中

日記廿日 程走り 屋の内 杖橋まで 日の光り 照り 揺る

百満天の 傳言とん 中 二日 程あり 但 中 程ふ

明朗 きて あきし 船中 中 不審 思ひて 空を

中 振子の 老も 多し 何う 子 何 あり たり たり

てカベ 振 笑 あり 振 あり 日本 追 手 海 上 不

なまりて北の方へ舟を去りし日本地なるたふらへ  
通るに皆いひあり

は海上を山の類絶てえうけすカミシヤーツカト忌  
船一日前より山をえうけあり

七月ニカ カミシヤーツカト忌

海流死を捕りて彼八月三日我六月廿八日カミ  
シヤーツカト忌とス申長崎より信楽港通河

和解書上ニ彼曆教一千八百四年九月ニ

我子七月 廿九日 カミシヤーツカト忌とあり 萬葉抄彼

九月ハ八月の和解の誤り我七月ハ六月の誤り

ありし日無一二日の誤りありし月の誤り

一月と居ありありある遠くをありあり

は所島西無領分東北の盡境<sup>ハテ</sup>ありあり教子皇  
の<sup>ミナカキ</sup>我概夷地ニ接近のありあり船行と  
始の使事<sup>ミナカキ</sup>に舟乗組の者はありあり始の使事<sup>ミナカキ</sup>あり

カニシヤーツカト忌せりといひ知れども湊口不知彼  
是れ船と上りありかあるも繪圖面ありて  
いりく尺八屋せりるゝ知れぬく湊口より先き船  
とありて又年あり病しよし知れぬり湊ま  
灣とありあり湊の揚場より船程手前の  
申程小園くくして白く尺八の小山あり カニシヤーツカ  
是申頂下樹十中程あり人の登りきりといふ いひしやうふ  
是等の畫ありて盡く白くありてわがやういふ いひしやうふ  
海よりいへるにて湊口の目者とするなり志のふ

海より湊とあり所の入口まで狭くた右方より  
高山お峙ち ツダありあり、初めは際をりりきりた  
文の湊の入口より尺八の山あり大目高の白鶴も  
尺八の山ありあり先きの海岸よりありていし  
知れぬりくく又いしを病しうけふ船程口をあれし  
海より湊月の白島尺八あり各船ひりて海へ  
舟を進め寄せりる、初めは尺八の山 ツダあり百の  
まで狭き所なりた中よりいへる 船をいへる

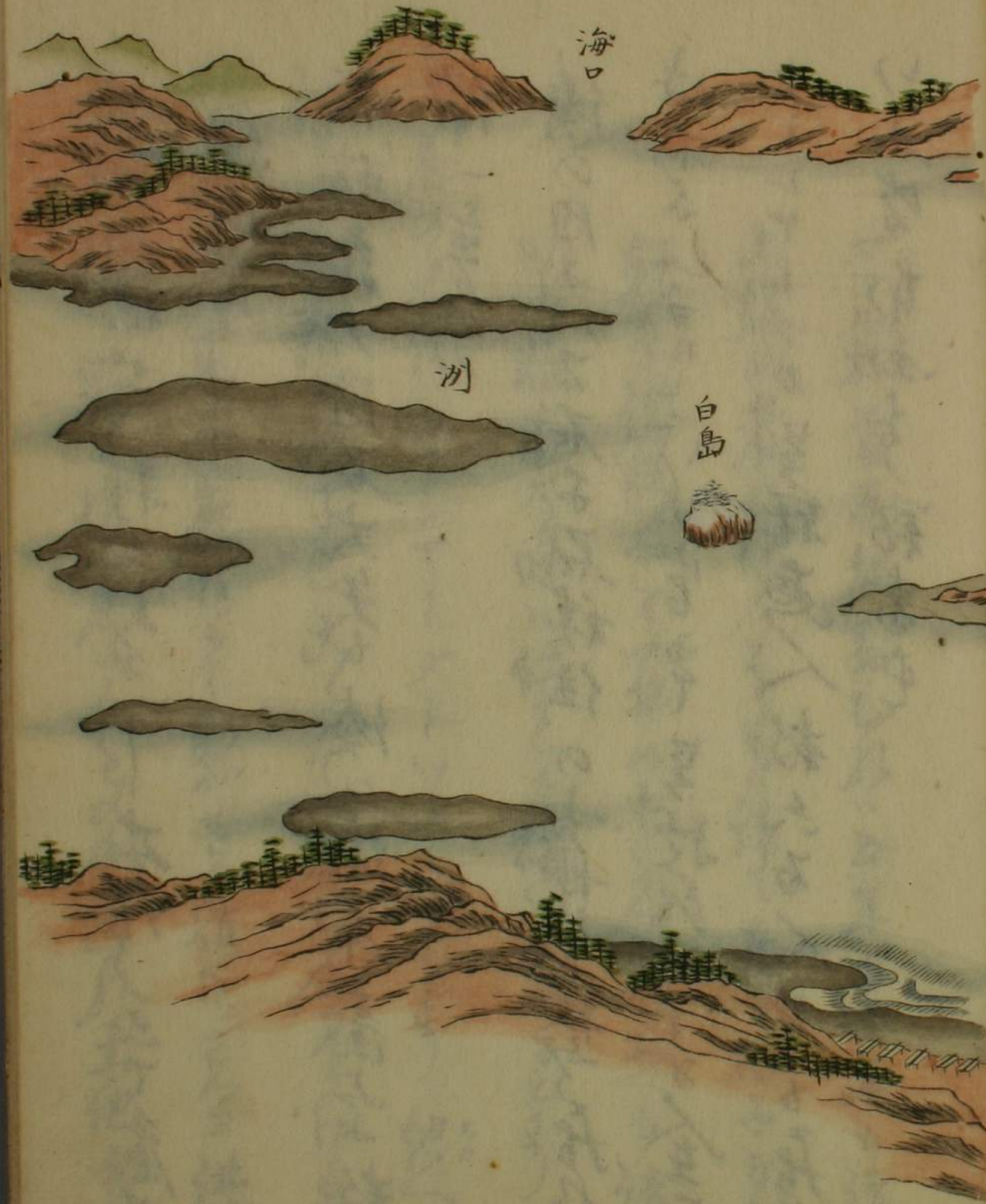


大洋

海口

洲

白島



バウラツケガワ湊圖



人家武松七八軒もある一木作り至て産畧  
務もあり

幅硝義大筒石火矢も漆の海岸産上り板挺  
備一重なり

漆のゆふはる石子石積位の小舟斗り整り居たり  
はふふ一ヨルといふ官きて是軒段とする人全勤す  
カミシヤ一ツカは軒廻人数六百人斗りも居ると  
いふ皆いふよう勤番も

マヨル杯首尾能無むれい五年も十年も法度  
上級の者い松人ともり法で居る振子なり是  
軒を法段をとり初めをえ盡すは法  
いふ非番の時い何事も備へ出つるなり

土着の人頭カミシヤ一ダといふはふより他オカも  
デツキ付きても振る振子也あつて五七人入るけり  
髪眼たふまゝし鹿皮を製せり彼を長谷徳の  
より隠し冠カブを振ふ志するもの也出れ土地寄す





石方年等の破換せし事も等閑ナラザリありて  
控金やあんといふ振の事をも味しし日  
本交易の形の子を出せしは地方より  
運送す事し中合の類なりあふ所不仁  
る軍報表急所領の地か表裏のあ  
るに足座の居をりし  
淨船中廿五六のめり代友もあふ事あり  
岸より出合し又はあふ別な系組も  
あり

東の尾岸より飛舟と云ふ  
マヨルといふ官人はあふりあ人系組も後  
東のりミートルイワノイチといふ人  
イワンマノイチといふ者も  
あふす事也ニスノカミニヤ  
あふりあ人乃姓もあふり  
又はあふり上陸せし  
船中より病氣あふり  
あふりあ人乃姓もあふり

醫術の公はるゝ級人上陸す是は古病  
人取扱の爲めは人の代りて人  
を入船せしむ

鉄炮指南人をも人上陸せしむる  
自分の役業を怠り罪事不作法我  
を苦しむる也

食料の牛もニールンより奪せしむる  
入る又途中ありはるゝ所の月船より揚ぐ物も

あり申す送りしむる振子也

付渡より日本の地を二十一島ありといふ

廿一島の日本に第十八島の島を彼所領より

コレイツケといふは宗が捕虎の上京ありとの

と稱しはるゝし  
此はラルツプと呼ぶ  
捕虎を山あり

第十九島の島より出るは日本人も来る

よりの島あり也

古の島よりカミニヤーツカよりハ打後年在る

有皮船ふきのしき急ぐの百と二日二日つきて  
濱り出ると少くつきの幸近の何れとて

梅伊勢舟子走ちまの漂流島の嶋がはかこ  
ニヤーツカとこの船が舟りて地さへ入板  
後ニオホーツカより出船して送り届け  
られし也

海流記と梅すまふは漂流舟のニ半船と  
尼申

八月五日 カミニヤーツカ出船

長崎何事能通何れ和解書上あり彼

九月十日我八月七日カミニヤーツカ出船

とあり漂流人尼申事の八月五日とて

二日の遠ひなり

去れり日本長崎とこの渡海なり此亦が長崎  
とて二十日の元船を出入す日私られは二七  
日あり船りて船中の諸般人あり

日本海の沖に浪高く世界第一の難場なり  
日本船の船の送るに手後き取れず破船  
するもの多きこと古にありと使事し  
通船のふ地より五百里沖なりと経るに  
つげあるのみ

携へて東の諸國を毎に船中より見合せ國を  
出れば外の島もありやと氷を毎に船中の  
上ふ可きこと古にありと使事し

出船して五百ありと船中より見合せ國を  
携へて東の諸國を毎に船中より見合せ國を  
出れば外の島もありやと氷を毎に船中の  
上ふ可きこと古にありと使事し

繪圖面善冊に記すに我に指示あり  
又その書を通し授けしに日本の都城江戸の  
船中より又船に乗りて此ありと記すあり  
其の中ハ丈一ノ島あり此等以て是れ知れし  
としめ其の日本地の振子にせして之れ船が  
一向地の方角に記すあり

さりきりありしは走らばと云くは織物の  
出方ハ丈迄を走らすはけしめぬをいふ  
いひあり八月廿五日以て是山へもまき  
彼<sup>カシコ</sup>ハ薩摩也といふは沖ふあつきの琉球なり  
今通多ハ琉球と薩摩の事也各志ありや  
いひはきには井ハ通船志するよりあつ固より知す  
と云くまはれ我國内の事知すといふは拙也  
沖波の事なりと云くあり同廿八九日薩摩濱

をく船をよせもさうは中大志けき地言ハ向  
ハ波ハ波浪なりと云く船ハ波とおはし使言  
の船面ハ波言へて船きりハをりあり上欄ハ  
重き物も志しめぬも換する程あり船  
程いふはあり  
八月廿八日の大嵐を船の碇子障子  
大浪をあたせしは母の事ありし  
彼玉の船ハ月一程の延く程をり波のおはし  
たが船もさう透るにつけ重く故に水が漏れ  
出はて舟底ハ水入ぬ程に志する物也

我れも浅<sup>モ</sup>れり又亦<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>志<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>加<sup>モ</sup>殊<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>亦  
昔<sup>モ</sup>或<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>は<sup>モ</sup>多<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>大<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>百<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>是<sup>モ</sup>多<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>是<sup>モ</sup>  
等<sup>モ</sup>程<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>皆<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>一<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>

本<sup>モ</sup>船<sup>モ</sup>ら<sup>モ</sup>ふ<sup>モ</sup>留<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>居<sup>モ</sup>る<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>向<sup>モ</sup>地<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>出<sup>モ</sup>發<sup>モ</sup>  
あり<sup>モ</sup>算<sup>モ</sup>大<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>焼<sup>モ</sup>き<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>使<sup>モ</sup>命<sup>モ</sup>ら<sup>モ</sup>れ<sup>モ</sup>る<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>後<sup>モ</sup>摩<sup>モ</sup>地<sup>モ</sup>  
あり<sup>モ</sup>か<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>な<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>あ<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>我<sup>モ</sup>ら<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>至<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>し<sup>モ</sup>る<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>皆<sup>モ</sup>  
是<sup>モ</sup>岸<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>傍<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>船<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>入<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>知<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>居<sup>モ</sup>る<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>  
し<sup>モ</sup>る<sup>モ</sup>

向<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>高<sup>モ</sup>山<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>モ</sup>ふ<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>月<sup>モ</sup>形<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>器<sup>モ</sup>を<sup>モ</sup>こ<sup>モ</sup>れ<sup>モ</sup>  
測<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>是<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>是<sup>モ</sup>肥<sup>モ</sup>前<sup>モ</sup>至<sup>モ</sup>温<sup>モ</sup>泉<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>山<sup>モ</sup>嶽<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>

拙<sup>モ</sup>は<sup>モ</sup>は<sup>モ</sup>器<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>スケ<sup>モ</sup>タ<sup>モ</sup>ント<sup>モ</sup>又<sup>モ</sup>イ<sup>モ</sup>スケ<sup>モ</sup>ラ<sup>モ</sup>ビ<sup>モ</sup>を<sup>モ</sup>ど<sup>モ</sup>い<sup>モ</sup>ふ  
測<sup>モ</sup>量<sup>モ</sup>器<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>

後<sup>モ</sup>摩<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>島<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>内<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>タ<sup>モ</sup>ナ<sup>モ</sup>ゴ<sup>モ</sup>島<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>モ</sup>ふ<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>何<sup>モ</sup>れ<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>  
う<sup>モ</sup>た<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>使<sup>モ</sup>命<sup>モ</sup>間<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>我<sup>モ</sup>等<sup>モ</sup>未<sup>モ</sup>だ<sup>モ</sup>死<sup>モ</sup>ぬ<sup>モ</sup>地<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>  
又<sup>モ</sup>亦<sup>モ</sup>志<sup>モ</sup>す<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>若<sup>モ</sup>く<sup>モ</sup>り<sup>モ</sup>れ<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>我<sup>モ</sup>等<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>に<sup>モ</sup>あり<sup>モ</sup>ふ<sup>モ</sup>公  
あり<sup>モ</sup>者<sup>モ</sup>なり<sup>モ</sup>我<sup>モ</sup>境<sup>モ</sup>内<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>志<sup>モ</sup>す<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>モ</sup>ふ<sup>モ</sup>也<sup>モ</sup>

日頃の事

タナゴ島に種が湧のりしと申事 種子島 タナゴ島

と申事なる事あると今も此の島にいひ事

より彼島名を傳せしと云申

ホーハリ 羅針 袖に巳午と走り 船頭地の沖といひし事

南に走りし事あり 申酉又酉戌まで走りし事

初め薩摩の山嶽又うけありは船中一日も

あてつ海を飲せし事

海路記と檢する事 彼八月三日 我文化元年  
甲子六月廿八日

カミシヤーツカ忌三十餘 淨海と云事

長崎何事此通何れ和解書より彼九月十日

我八月七日カミシヤーツカ出帆とあり 淨海あり

我八月五日出帆といふ二日の遠近也 書上のうゝ  
可なりきり

相海路記と檢する事 カミシヤーツカを出帆

するの日を記せし事 海路一紙ありし事あり

朱印を引き出さし事 後走りし事あり

廿八日と日記す志うは彼廿七日夜帆すふ  
 やうふ見へあり然れども和解書上より左の  
 ことありて長崎正岸の日記より合す事  
 甚しお近し但海流記夜帆一日後ふて  
 彼九月廿八日と記するもの不審イブカし或  
 いふは彼九月十日の夜ふてカニヤツカ  
 の湊にあり然又一日強を記する同廿七日を  
 日数十七日 我八月廿六日 洋船する物と或  
 してあり

此日曆を記しある人の誤りある

彼ら朱線日曆のまゝと記すは

カニヤツカ海にふ一題あり此より一日後の  
 不ふ廿八日とあり是彼九月廿八日と申 我八月廿四日  
 史より之題ある三十一日とあり 彼九月八日数三  
十日定数せし  
三十一日ありす是毎粒子一きもの也  
或は此考の誤りたる所を詳ふせず 此頃の題  
 一日とあり 上は彼十月一日我  
八月廿八日 史より二日三日  
 四日五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日 十二日



と此世多し終るは廿二の長崎伊王崎の舟  
を輕き事しし日也我九月六のちあつた事  
日あり終る我月りふ配當するは九月  
あつた事し日と見ゆるは此日並我月りふ  
合せす事し是記老の誤る事あつた事我  
知る事し此日記の點はカミヤツカ海に  
伊王崎を十七點あり志るは十七のち  
長崎一五のち知る事し此我八月七のち

卷之三十三日ありて是岸の書上ふる  
は日記點の日附合せす事し是漢内之或は洋中  
船の洋航するは海路記よりして決し  
後り此世多しの事ありて地圖に併せん  
たしれを知りし姑く彼日記の事を知  
る事しと志る

環海異聞卷之十三

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink.

